題名「なるようになるしかない」

俺には、もったいないくらいの頭が良くてスタイルもいい妹が居る。
しかし、そいつは普通人の俺には異様に冷たく、あんた呼ばわりでとても理不尽だ。
世の中にはツンデレというのがあるらしいが、あいつはデレが無いのでツンツンだよ、とほほ。

「おはよう、桐乃」
「チッ、おはよう」
朝の挨拶もこんな感じで朝から険悪である。
気を取り直して朝食を取り、高校へ登校した。

「おはよう、きょうちゃん」
「おはよう、麻奈実。ああ、おまえが居るから俺は生きていけるよ」
「どうしたの？ 朝から」
「最近、桐乃が異様に冷たいんだ。わけがわからない」
「なにか、心当たりあるの？」
「無いんだよ」
「きっと、きょうちゃんは悪くないよ、大丈夫だよ」
麻奈実は、俺の横に寄り添ってくれる。
「そうかな、そんな気になってきた」
麻奈実の笑顔とぬくもり、それで俺は今日もやっていけそうだ。
特にどうと言うこともない一日が終わり、俺はうちに帰ってきた。

誰も居ない玄関を抜けて2階の自室に戻り宿題を片付け始めて、しばらくしたら、隣の桐乃の部屋のドアが開いたので帰ってきたようだが触らぬ神に祟りなし、だな。

「ふたりとも～ご飯よ～」

母の声だ。ああ、そんな時間か。と部屋から出るとちょうど、桐乃も出たところだ。
「あ…あんた、人生相談あるから、後であたしの部屋に来て」
「じ、人生相談？何か深刻なことがあったのか？」
「とにかく、いいよね？」
「ああ」
俺の頭にはもやもやとしたものが立ちこめたが、このところの桐乃の様子の原因がつかめるかもしれないと刑事のような気分で俺は夕飯を食べた。
俺の父親は警察官で厳しい。食事中も基本的には会話もない。
「いただきます」
こうして、もくもくと晩飯を食べ、父から学校の様子など聞かれ、俺たちは、そつなく答えたりしつつ食事を終えた。
「ごちそうさまでした」
俺と桐乃は食器を洗って片付け、2階に上がっていく。
「ついてきて」
「ああ」
俺は桐乃の部屋に入る。桐乃は本棚を動かして、
「見て」
本棚の裏側には、まるでゲームショップのアダルトコーナーのような美少女ゲームのパッケージが並んでいて、原画集まである。
俺は、衝撃を受けていた。
「あたし、さ、こういうの好きなの」
「…知らなかった。こんなに買うにはずいぶん金がかかると思うが」
「父さんには言ってないけど、モデルのバイトとかしてるのよ」
「スタイルがいいとは思ってたけど、意外だな」
「ばか、もう。それでなんだけど、判らないことがあるの。
たとえば、今、このゲームをしているところなんだけど」

桐乃は机の上のノートPCを開いて、マウスで操作している。

ゲームを立上げ、セーブデータをロードしたら、そのシーンが展開された。
画面の中では二人の思いが高まって、セックスが始まっている。
桐乃はマウスをクリックし、画面を進めていく。

俺は邪険にされてる桐乃とどうしてこんな扇情的な画面を見ているのだろう。
桐乃はほおを赤らめ、もじもじし始めた。
「そ、それでね？こう言うのを見ていると変なことが起きるのよ」
「変なこと？」
「触ってみれば、判るから。こんな感じ」
桐乃は俺の手を取って、パンツの中に差し入れた。熱いな。
そして、ぬるぬるし始めてる。これは…。
「ねえ、これってもしかして病気なの？」

これは、言葉を選ばなければ。あれだけの美少女ゲームをして桐乃は判らなかったんだ。
たぶん、本能で非常に気になったけど、それでも。

「こほん。これはだな、健康な女子ならば、こうしたのを見るとそうなってくるのは……自然だな、うん」
手はパンツの中のままだ。中を探ってみるとやはり、愛液だな、これは。
指がスムーズに出入りするくらいだから。

「そこを触られてると何か、変な気持ちになってきたよ…気持ちいいかも」
「桐乃は、どうしたい？すっきりしたいとか？」
「うん。こうなるとおなかが重いというか、変なのよ」
「じゃあ、ベッドに仰向けに寝てくれ。俺は必要なものを取ってくるから、ちょっと待っててくれ」
「うん…」

桐乃がベッドに移動している間に俺は、こういうことがあるかもしれないと買って置いたコンドームを取りに行って、隠し場所から引出した。
念のため、２個切り離したが俺の心臓はバクバクだった。
これはどう見ても、そういう流れだよな。

でも、何だ、治療、治療なんだ。桐乃が病んでしまっている。
だから、大丈夫だ。自分に言い聞かせながら桐乃の部屋に戻った。

「待たせたな」
「それ…なに？」
「ああ、これは必要なものなんだ。これがないと問題が生じるというか」
「そうなの…？」
桐乃はしおらしい。
「これからすることは、儀式みたいなものなんだ。だから、驚かないで素直に従って欲しい。終えたら、きっとすっきり治ってるよ」
「うん。じゃあ、始めて？」
「ああ」
俺は桐乃にキスをした。ちゃんとした手順でしないとな。
すでに欲情している桐乃は、ちょっと驚いたが素直に俺のされるままになっていた。
柔らかな唇の間に舌を入れて吸い合う。俺の手は桐乃の小ぶりな乳房を優しく揉みしだいていた。
桐乃の息が荒くなってきた。

「どうだ、少し楽になってきただろう？」
「ぼうっとして…いい気持ちになってきた」
「順調だな。じゃあ、服を脱がせるぞ。俺も裸になる」
「そうしないとダメなの？」
「ああ」

桐乃がうなずいたので、俺は桐乃のスウェットを脱がし、ブラジャーとパンツも取って俺も裸になった。

そして、桐乃を抱きしめた。

「気持ちいい」

「そうだな」

桐乃の体と俺の体は磁力を帯びたように引き合っていた。

肌の感触が気持ちいい。俺はもう一度、キスをして、首筋、鎖骨、そして、乳房にキスをした。

立ってきた乳首を優しく愛撫し、舐めた。

「ゲームと…同じだね」

「そうだよ。桐乃も同じように体験するんだよ」

「うん」

なめらかなおなかの方に移動し、さっきの熱かったそこにたどり着く。

もわっとしてぬめるそこを丁寧に舐めていく。

桐乃は小さく声を上げたり、ため息をついたり。

舌を膣に入れて、ほぐしていく。

桐乃の太ももを開き、逃れようとする桐乃を愛撫していくと、桐乃は俺の頭を押さえてよがり始めた。

膣に指を入れて中を広げていき、クリトリスを優しく舐めていく。

桐乃は腰をそらせて快感に耐え、指を2本に増やして奥まで中を弄り、クリトリスを吸い上げて舐めていたらブルブルし始めて、やがて、ぴゅぴゅっと潮を吹いて、イった。

「どうだ？、桐乃」

「すごく良かった。ばーんって訳がわからない感じで。でも、あそこがまだむずむずする」

「よし、ちょっと待ってくれ」

俺は、コンドームを取り、封を切った。慎重に表裏を確認して、もう先がぬるぬるになってる俺の陰茎に根元まで装着した。

「それって、おちんちんに着けるんだ」

「ああ。で、これを桐乃に入れる」

「入れる？あ、あぁ、入ってくる。なんか、すごい」

俺はぎんぎんになったちんこを桐乃の膣に押し当て、ゆっくりと挿入した。

暖かくて柔らかな感じに俺のが包まれていく。

何ともいえない心地よさに危うく射精しそうになってしまった。

危ない危ない。

「よし、奥まで入ったぞ。これをこうして、出し入れしていく」

「あ、あ、これ、これなのかな。いっぱいになってくる」

「桐乃の腰を重くしていたのは、こうしないと解消されないんだ」

桐乃は感じ入っている。ゆっくりとゆっくりと腰を使いつつ、つんと立った乳首を揉んだり、乳房を柔く握ってみたり。

はぁはぁと喘ぐ唇が愛おしくなり、キスしたりしながら、体が馴染んできたのでどんどん激しくしていく。

桐乃は汗ばみ、体をよじり、高まっていく。

「なんか、もう、ダメ。京介、京介～！」

「ああ、そろそろかな。じゃあ、行くぞ」

「行くって？ ああ、もうダメ、あたしもいくいく～」

「うっ！」

俺は、桐乃に中出しした。もちろん、コンドームしているから大丈夫だ。
してなかったら、危なかった。
「どうだ？桐乃。すっきりしたか？」
「すごく、さわやかな気持ち。ありがとう、京介」
気持ちのこもったキス。
「俺もいい気持ちだ。このところ、桐乃が辛そうだったから、心配してたんだぞ？」
「ごめんなさい。でも、どうしていいか判らなかったの」
「そうだな。じゃあ、汗かいちゃったから、風呂に入ってこいよ」
「一緒に入ろうよ」
「親父たちがいるから、それはヤバイだろう」
「あ、そっか」
俺は桐乃のあそこを拭いてやり、俺はコンドームを取って、縛った。
「それ、あたしにくれない？記念に」
「ああ、いいよ。でも、ちゃんと隠しておけよ」
「うん、ありがと。これ、京介のおちんちんから出てきたの？」
桐乃はしげしげ見ている。
「ああ、精液だよ。気持ちよかったからいっぱい出た」
「そうなんだ～へ～。どんな味なんだろ？」
桐乃は机にあったはさみでコンドームを切って、中身を飲んでしまった。
「おいおい」
「だって、ゲームの中の子は飲んでたよ？なんか、生臭いような、でも、こくん」
「飲んじゃったのか」
「毒じゃないんでしょ？」
「そうだけど、ちょっとエロかった」
「やだ、京介のおちんちん、また大きくなってる」
「いいから、風呂に入ってこいよ。俺は着替えて部屋に戻るから」

「あん、もう」
俺はそそくさとパンツをはいて、スエットを着た。
「ありがとう、京介。助かったよ」
「ああ、良かったな。じゃ、おやすみ」
「おやすみ」
桐乃にいつもの笑顔が戻ってきた。これでいいんだよ、これで。
俺は独りごち、自室に戻った。気分転換に PC を立ち上げて、ネットサーフしているうちに部屋にノックが。
「お風呂、空いたよ」
「ああ。もう、口調が柔らかいな、桐乃」
「ふふふ」
風呂場に入ってから、あれ？口の中に何か？と思ったら、桐乃の陰毛だった。
はあ、なんかとんでもないことしちゃったなあと思いつつ、シャワーを浴びて体を洗い、風呂に浸かった。
これで平凡な日常が戻ってくるんだと思ってるとにやけてきた。
成り行きとはいえ、俺もこれで脱童貞、大人の仲間入りってやつだよ。
風呂から上がり部屋に戻り、ベッドに寝転がると疲れていたのか吸い込まれる様に寝てしまった。
翌朝は、桐乃と顔を合わせるとうれし恥ずかしな感じで母さんに怪しまれたりしつつ、いつものように学校に向かった。
なんて事無く授業を終えて、帰り道は麻奈実に会ったので一緒に帰った。
公園に寄ってベンチに腰掛けて、あれこれ話したり。

「きょうちゃん、今日はなんか雰囲気違うよ？」
「そうかなあ。このところ桐乃がおかしいって話してたじゃないか」
「うん。桐乃ちゃん、どうしてる？」
「昨日の夜、桐乃から相談があるって呼ばれてさ」
「うんうん」
「あいつ、何というか……性知識がおかしいんだ」
「えっ？！」

「エッチなゲームとかあるだろう？女の子なのにあいつ、ああいうのをこっそり買っていて、その、ゲームしていると体がおかしいって言うんだ」
「な、なにそれ。からだがって？」
「聞いてみるとたぶん、ふつうに感じてるっていう風だったから、こうすればいいよって、教えてあげたよ」
「…教えたって、どういう…。」

「ちゃんとしたよ。そうしたら、桐乃が判ってくれて穏やかになった」
「へ、へー良かったわ。桐乃ちゃんもこれで安心ね。ねえ、きょうちゃん、今度はあたしが不安になって来ちゃった」
「えっ？今度は、麻奈実まで。どうしたらいいんだろう」

麻奈美は意を決したように俺を見つめている。
「きょうちゃん、判らなかったかもしれないけど、あたしはあなたに恋してるの。はっきり言って大好きなの」

俺は衝撃を受けている。好かれているとは思っていたがそうだったんだ。
「改めて言われると、動揺するよ」

「桐乃ちゃんとあたし、どっちが好きなの？」

誤魔化しの利かない事態だ。
麻奈実は俺を見つめて、そして、返事を待っている。
桐乃と麻奈実？迷う事はないさ。妹と幼なじみ。

「俺は、麻奈実が好きだ」

麻奈実の肩を抱いて、そして唇を合わせた。昨日の勢いか、つい頼りない麻奈実の舌を堪能してしまい、麻奈実はくったりと俺にもたれかかってきた。

「きょうちゃん。あたし」
「麻奈実。俺たち、いつの間にか恋人同士になってたのか？」
「あたしはそのつもりだったよ？きょうちゃん」

麻奈実の真摯な瞳から目が離せない。
幼なじみだったけど、こんなに愛おしい存在になっていたんだな。

「今日、うちに寄るか？」
「うん」

家までの間、麻奈実は腕を組んで寄り添って帰った。

「ただいまー」「おじゃましまーす」
「なんか、誰も居ないみたいだな。まあ、俺の部屋に行こう」
「きょうちゃんの部屋、なんかひさしぶり」
一緒に階段を上がって部屋に入った。麻奈実は鞄を置いて、ベッドに腰掛けてる。
いつのまにか胸も大きくなって。

「やだ、きょうちゃん。どこ見てるの？」
「いやその、麻奈実も女らしくなったなって」
「じゃあ、さー…きょうちゃん」

麻奈実はベッドにあおむけに寝転がり、こっちを誘うように見てる。

「麻奈実、俺は…」
「きょうちゃん、いいよ。あたしのこと、好き？」
「ああ、好きだよ、麻奈実！」

思いのままキスをして、ブレザーやワイシャツを脱がして、お互い、裸になった。
麻奈実はぼうっとされるがままになっている。
俺は、耳の裏にキスしながら、

「麻奈実、かわいいよ」
「きょうちゃん…」

なんて、昨日とはノリが全然違う。麻奈実のおっぱいは大きい。
それを見ていたら、あれをしたくなる。
俺はちんこを麻奈実のおっぱいに挟んでパイズリした。
「きょうちゃんたら、もう」
「麻奈実のおっぱいを見てたら、たまらなくて、ごめん」
「いいよ。きょうちゃんのおちんちんだもん」

むちむちして吸い付くような肌触りがたまらない。
麻奈実は乳房の間からひょいひょい出てくる俺の亀頭をぺろぺろ舐めるもんだから、たまらず俺は麻奈実のおっぱいに射精した。

「あったかい。これがきょうちゃんの精液なんだ」

俺の精液を胸になでつけたり、舐めたりしている麻奈実が異様にエロい。
俺は麻奈実の股間にむしゃぶりついた。

「あぁっ、いきなり」
熱くなったそこをなめ回し、吸い、弄った。
「きょうちゃん、きょうちゃん。いい、いいよ」
つい、夢中になって続けてしまい、麻奈実は、イってぐったりとした。

俺は、コンドームを探しにベッドを降りようとした。
「きょうちゃん、着けなくていいよ。はじめては生でしたいから」
「大丈夫かな」
「大丈夫だよ。きっと」
「麻奈実、じゃあ、入れるぞ」
「来て、きょうちゃん」

熱くぬめる麻奈実の膣口に俺のちんこを押し当て、押し込むと痺れるような快感が背筋を走った。
ああ、これが生なんだ。

「きょうちゃんが入ってる」
「ああ、麻奈実と一つになれたよ」
「きょうちゃん」
「麻奈実」

抱き合って、つながりあった。熱く柔らかい麻奈実の体はたまらない。
すぐに高まってきて、麻奈実も俺の動きに良く反応して、もう俺は、我慢出来なくなり、夢中で腰を使っていくと麻奈実は高い声とともにイった。

俺はギリギリでちんこを引き抜いて腹の上で射精した。
「はぁはぁ。中出しでも良かったよ？」
「はぁはぁ、それは、さすがにまずいと思った、から」
ティッシュでそれを拭いて、麻奈実の股間もぬぐって、俺のも拭いた。
「きょうちゃん…もう一度したいな…」
「ああ、俺もそう思ってた」
麻奈実を四つん這いにして後ろから股間を舐め、柔らかなお尻をつかみ、その割れ目に挿入した。
「あぁっ、奥まで来るよ」
「麻奈実、麻奈実！」
後ろから激しくつきながら、たゆんたゆんする乳房を揉み、高まっていく。
いったばかりなので俺は余裕があり、麻奈実はいったばかりなので何度も軽くいって、そしてまたどうにもならない衝動が高まってきたので、無我夢中で強く突き入れ、麻奈美が息を詰めて背筋を震わせてたとき、陰茎を引き抜いて、背中に射精した。
「京ちゃーん、すごかったよ。麻奈実はまっしろになったよ」
「すごく気持ちよかったよ。麻奈実」
「きょうちゃん…」
余韻でキスしていると、がちゃっと玄関が開いた音がした。
「ただいまー」
「あ、桐乃が帰ってきた。ヤバイ」

「ヤバイね」
慌てて、あちこち拭いて服を着て、窓を開けて換気した。
とんとんと桐乃が上がってくる足音がして、ドアが開いた。
「誰も居ないの～？ あ、麻奈実さん」
「こんにちは、桐乃ちゃん。お邪魔してます」
「おかえり、桐乃」
「麻奈実さんなんて、ずいぶん久しぶりよね。どうしたの？」
ギク！異様に鋭いな。
「別に、ちょっと勉強のこととかでな？」
「そ、そうよ。あの課題、やっておかないと」
「そうそう」
鞄を開けて、今日の課題を出したりして。やあ、焦るな。
桐乃は納得しない顔して、出て行った。
しばらく課題をやって、落ち着いた頃、
「きょうちゃん、そろそろ帰るね」
「ああ、送っていくよ」
とそろりそろりと二人で階段を降りて、玄関から出た。
「いやあ、焦ったな」
「うん、ちょっとびっくりしちゃったね」
いい雰囲気でちょっとくっつき気味で歩いた。
「きょうちゃん、男らしかった」
「俺は麻奈実がいろいろ知ってそうで意外だった」

「あたしだって、そういう知識あるもん。でも、まだ、きょうちゃんが中にいるみたい」
「なんか、俺は麻奈実に包まれてる気分だよ」
温かい気分の中、ぽつりぽつりと話すうちに麻奈実の家に着いた。
「じゃあ、おやすみ、麻奈実」
「おやすみ、きょうちゃん」
チュッとキスして別れた。しばらく歩いて振り返ると麻奈実が見ていた。
俺は手を振って、麻奈実も手を振った。
そんな仕草で麻奈実との絆の深まりを感じつつ、夕飯の時間も近いから、俺は足早に家に帰った。
「ただいま～桐乃？」
玄関に桐乃が居た。
「おかえりー…遅かったね」
「おまえ、怒ってるのか？　どうした？」
「知らない！」
また、きっついに戻ってしまった。ヤレヤレだぜ。
夕飯になったが、今朝とは打って変わって険悪ムードの俺たちに母親は微妙な表情だ。
ともあれ、いつものように夕飯を終えて俺は部屋に戻った。
部屋はまだ、麻奈実の残り香があるなあと和みつつも、途中だった課題を終えてネットサーフしていたら、
「京介、お風呂に入りなさい」と母の声がしたので部屋を出ると、
桐乃がドアの隙間から睨んでる。ちょっと寒気がした。
風呂に入ってのんびりするとさっきの麻奈実とのことを思い出して、つい、勃起してしまう。
でも、どうだろうか。今までと変わるかな。

麻奈実だから、同じかな。
そんなことを思っていると勃起も鎮まり、体を洗って出た。
部屋に戻ってPCをスタンバイさせて、今日はもう寝ることにした。
すっかり寝入った頃、ドアがそっと開いた気がした。
そして、ベッドに誰か潜り込んで背中に抱きついてきた。
「ん…何だ？」
「大声出さないでよ」
「桐乃か。ああ、なんか怒らせちゃったか？ごめんな」
「麻奈実さんとさっき、何かしてたよね？」
「桐乃には隠せないか」
俺は桐乃に振り返って、顔を見た。
「俺と麻奈実は幼なじみだったけど、今日、恋人同士になったんだ」
「そう、なんだ。あたしと京介は？」
「兄妹だろ？昨日のことは、おまえを思ってしたことで」
「あたし、すごくうれしかった。気持ちよかったし」
「でもさ、あれから考えたんだ。好きでないとできないよね？気持ちがないとさ」
「そうだよな。俺とおまえは生身だ。ゲームのキャラじゃないもんな」
「そう、そうなの。ああいうことしたキャラは結ばれるっていうか、
恋人になったり、結婚したりするのよ？」
「俺、とんでもないことしちゃったのかな。ごめん、桐乃」
「謝らないでよ。謝られたら、あたし、あんたを許せない」

桐乃の顔は消え入りそうな不安な表情だった。

「このところの桐乃が気になっていて、それであんなこと桐乃がしてきたから、俺はおかしくなっていたのか」
「あたし、異常なのかな」
「俺は、桐乃のことが好きだ。いつも気になる。だけど、それは兄妹愛なのか恋愛感情なのかわからなかったけど」
「うん」

「ああして、桐乃を抱けたのだから、恋愛なのかな？」
「かなってあたしも判らないよ、どうしたらいいの？」
「一つ、はっきりしたことがある」
「なに？」

「以前より、桐乃との距離が縮まった。俺にはそれがうれしいよ」
「そうだね。なんか、安心しちゃった」
「もう、してしまったことだし、急いで答えを出す必要は無いよ」
「うん。京介が遠くに行っちゃう気がして不安になったの」
「どこも行かないさ。おやすみ、桐乃」
「おやすみ、京介。チュ！」

なるようになるしかないさ。俺もぐっすり寝た。

翌朝、なんか下半身がスースーするし、変な感触があると思ったら、桐乃が騎乗位で腰を振っていた。
「桐乃、朝から何してるんだ？」
「起きたらさ、おちんちんが元気だったの。だから、入れてみた。気持ちいいよ、京介」と、もたれかかってきてキスしてきた。

時計を見るとまだ一時間くらい余裕があるけどさ。

「こんなんでいいのか？」
「だって、仕方ないじゃん。あ、急にもう、いい、きてきて」
「時間が無いから、飛ばしていくぞ～ふんふん！」
「だめ、だめ、もう、いっちゃう！」
「ふぬっ！」

俺は桐乃から引き抜いて、外出しした。

「舐めちゃおうかな」
「ダメダメ、口臭に出るぞ」
「えっマジ？」
「変な噂されちゃうぞ」
俺はティッシュで念入りに拭いて、桐乃をどかして身支度して通学に備えるのだった。
桐乃もしぶしぶ自分の部屋に戻り、二人で一階に下りた。
まあ、なるようになるしかないさ。

「私の家に来ていただけますか？」

あやせから、そんな文面でメールが来た。何故だろうか。

「近親相姦上等の変態兄貴」と誤解されている訳だから生真面目なあやせから、わざわざそんな誘いがあるわけが無いのだが…気がついたら、あやせ宅まで来ていた。

「お兄さん…、来るの早すぎじゃないですか？」
「君の真摯なメールを読んだら、もう、ここに着いていたよ？」
「もぉ、何を言ってるの…早く上がってください」
「おう」

階段を上がって、あやせの部屋に招かれた。がちゃりと後ろ手に部屋の鍵が閉められてしまった。
こ、これは…。
あやせは思い詰めた表情でイスに座った。

「とりあえず、ベッドの上にでも座ってください」
「ああ。それで、どんな用件なんだ？」
いい匂いがする。きめの細かいシーツがひかれてるな。
「私が桐乃を好きなのを知っていますよね？」
「あ、ああ。まさか、俺はここで始末されるのか？」
「馬鹿言わないで黙って聞いてください。お兄さんが桐乃をち、治療？してから何かこう、大きな差を感じるんです」
「ち、治療な。ああ、あれか」
他人から"あの"ことを言われると冷や汗が出るぜ。

「大きな経験をこなした余裕というか、感覚の差？そういうのを感じて、辛いんです」
「まさか、その…」
「同じような体験をすれば、わたしも桐乃と同じとこに立てると思うのです。ですが、誰でもいいってわけには」
「それで、俺に相談って訳か。でも、俺が言うのも何だけど大事な相手に捧げるべきじゃないのか？」
「以前、結婚してくれとか言ってましたよね？それならば、できるってことですよね」
「俺の側としては可能ではあるが、あやせはどうなんだ？」

部屋に漂う、いい匂いが強まった気がする。あやせは、ほんのり赤くなっている。

「わたしは、むしろ…いえ、決心してるんです」

勢いや思い違いであれば、キスでもすれば俺を突き飛ばすだろう。よし。
俺は、ベッドからすっくと立ち上がり、あやせに向かい、腰をかがめて、その可憐な唇に俺の唇を合わせた。

意外と激烈な反応がなかった。あやせは戸惑いの表情だ。

「これ以上のことをするんだぞ？いいのか？」
「続けて、ください…。」

周りにソフトフォーカスがかかるようなこんな子を、どこぞのチャラ男にあやせが抱かれるくらいなら、俺がしてやんよ！

「これも、用意しました」
「この箱は、アレか」

プラスチックフィルムを開いて、個別になったパッケージを見つめつつ、気を取り直す。
浮気じゃない。そう、あやせに特別な体験をさせてあげる手伝いをするだけ、それだけだ。
あやせをお姫様だっこして、ベッドにそっと座らせる。
抱きしめてみると、華奢だ。部屋着を脱がし下着姿にして、ベッドに寝かせた。
俺もパンツ一丁になった。

あやせを見つめながら、優しくすべすべした手足をなで髪の毛をなでつつ、
「きれいだよ、あやせ」
なんて言葉をかけて、キスをして舌を割り込ませ、あやせの舌を弄んでいく。
やさしく乳房をもみほぐしていくとあやせから甘いため息が漏れる。
ブラジャーを外し、むき出しになった乳房をもみつつ、突き出した乳首を口に含み、
舐めると声が漏れる。

「どうかな？　あやせ」
「思ったより…。」
大丈夫そうだな。なめらかなおなかをなで、パンツを脱がし、その付け根の淡い茂みを
優しく包んだ。
あくまでソフトに乳房の愛撫をしつつ、熱を持ち始めた、そこを刺激していく。

ふーふーとあやせの息が荒くなってくる。
両太ももを開き、湿ったそこをやさしく舐めていく。
頭をもたげたクリトリスを舐め、ひだをかき分けて透明な液体を垂らし始めた膣口に舌を入れて
いく。
指の腹でクリトリスを弄りつつ、蠢き始めた膣の中を探っていき吸ったり出し入れしているうち
にあやせは背筋を反らし、ひとしきり呻いた後、荒い気を吐きつつ、ぐったりとした。

コンドームのパッケージを破き、すっかり漲っていた俺のちんこに根元までしっかりと装着した。

「少し、痛いかもしれないぞ」
「はい…。」

うるおい、熱くなったそこにちんちこを当ててぬめりがまんべんなく着くようにして、あやせに
覆い被さり、抱きしめて腰を沈めるように挿入していった。

何度かあやせは苦痛を感じていたようだが奥までたどり着いた。
やさしくキスをして乳首をもみほぐした。そろりそろりと動き始めるとあやせは俺の背中に手を
回し、抱きしめてきた。徐々に中のこわばりは無くなり、あやせは、あっあっと絶え間なく小声を
漏らすようになってきた。

熱に浮かされたようにあやせの顔は上気し、汗が流れる。
熱を持ったあやせの中に自分のものが溶けてしまったような例えようのない快感を、いつまでも
味わっていたかったが長くは続かず、どうしようも無い衝動が上がって来たのでがむしゃらに腰を
使って、悲鳴のような声を上げるあやせの一番奥でびゅーびゅーと射精した。

「どう、だったかな？がんばってみたんだが」
「はぁはぁ。この、充実した感じ、こういう体験を桐乃もしたんですね。
お兄さんに頼って、ほんとうに良かった…。」

あやせは泣いていた。やさしくキスをする。

「あの…さ、このことを桐乃に言うのか？」
「いいえ、絶対に言いません。あくまで桐乃と同じ感覚で居られることが大事ですから。
というか、お兄さん？」
「はい？！」
「わたしが将来、誰も良い人が居なかった場合、責任をとって結婚するんですよ？
わかりましたか？」

「えぇっー！」
「そんな覚悟も無しにわたしを抱いたんですか？　うかつ過ぎですね」
どうしてこう、女ってやつは後出してトンデモナイことを言い出すのだろう。
「さあ、終わったんですから、さっさと服を着てください」
「へいへい」
コンドームを外して口を縛って、ティッシュで陰茎を念入りに拭いた。
あやせのもきれいに拭って、それぞれティッシュにまとめて捨てた。
無言でそれぞれ服を着て、ほっとした。
窓を開けて換気をして、俺は帰ることにした。
さっさと部屋を出ようとする俺の背中にあやせは抱きついてきた。
「本当ですからね？　結婚のこと」
「ああ、美人のおまえなら、俺なんか不要だよ」
ドアの鍵を回して廊下に出た。二人で階段を降りて玄関の靴を履いて、
「じゃあな、あやせ」
「今日は、本当にありがとうございました。では、さようなら」
歩きながら、また墓穴を増やしてしまったなあと後悔した。
まあでも、こんなモテ期は一瞬で、将来ぼっちだったりするんだろうな、と夕闇の中で漠然と思いつつ帰った。

「沙織からの誘い」

このところの騒動で沙織にずいぶん負担をかけたなあと思っている頃、
一通のメールが届いた。
「京介殿、個人的に相談したいことがありますので、誠にご足労でありますが、
拙宅までいらしていただけないでしょうか？」
あの沙織が？　高級マンションでのお嬢様姿を見ているだけに、妙に期待してしまう俺だ。
承諾の返事をすぐに出して週末の十五時頃に向かうこととなった。
「さて、着いたな。携帯で知らせるか」と沙織に電話すると自動ドアが開いた。
ちょっとしたホテルみたいなエントランスに入り、所在なげに待っているとエレベーターから沙織が現れた。
「よぉ！　来たぜ」
「こんな所まで呼びつけて、申し訳ございません。付いてきてください」
「ほいほい」とエレベーターに乗った。
ぐるぐる眼鏡ではなく、ゆったりとしたドレスを着たお嬢様スタイルだ。
どうも、沙織が緊張しているのが俺にも伝染して、無言のまま最上階へ。
「こちらです」
「ああ…。」

なんだここは。海が見え、周囲が一望できる巨大なリビングに広い部屋。
セレブだっていうのがイヤと言うほど判る。
招かれるまま、革張りのソファーに身を沈めると窓の外に雲が流れる風景に圧倒される。
こんな所に住んでみたいもんだぜ。

沙織は紅茶を入れたポットを持ってきて、カップに注いでいく。
芳香が立ち上り、ふっと気持ちが楽になる。
そして、沙織は何気なく隣に腰を下ろした。ほんわりと包まれるような温かさが心地よいな。

「それで、相談って？」
「はい。自分なりに、自分のできることを頑張ってしていても、何だかんだで京介さんが大半を解決してしまいます」
「そうか？　大して役立ってないと思うがな」

俺こそ、沙織に尊敬してしまうことだって多いしさ。

「それで何でも自分で解決しようとしないで頼ってしまうことも、時にはいいかと思いまして……、京介さんに甘えようかと」

沙織はしなだれかかり、俺の方に首をもたげてふわっと何か誘われるような香りが漂った。

「誰だって、疲れるときはあるもんな。お前は良くやってるよ、沙織」
髪の毛をやさしくなでてやる。
「心地よいです」

午後の気だるさも相まって、蜜のような時間だ。
雲間に日差しが差し込んで来て、いい雰囲気だなあ。

紅茶が冷めないうちに飲んでしまおう。ハーブが入っているのかな？
変わった風味だった。

雲の形が変わってしまう頃、沙織は立ち上がり、するっとドレスを脱いでしまった。
午後の逆光の中、全裸だ。

度肝を抜かれているとくるっと振り返り、俺に背中を向けて密着して座り、
蛇のように首に腕を回して、濃厚なキスをしてきた。
沙織から、甘く熱い息が漏れる。
とろけるような微笑みで俺を見つめている。
「沙織…、お前」
「お嫌ですか？　京介さん。そうでなければ、いつも空回りで寂しい沙織を慰めて欲しいのです…。」
微熱を帯びた柔らかい尻が俺の股間を刺激して、困惑する。
「ここには、私と京介さんしか居ませんし、ひとときだけの事です」

またかよ！という気持ちだ。でも、沙織は交際範囲が広いようで、親しいつきあいは俺たちだけだって言ってたっけ。
その中で男性は俺だけとなれば、仕方ないのか。

「判った。一度だけ、だからな？」
「はい…では、どうぞ…。」

沙織は、妖艶にほほえんで俺の手を弾力のある乳房に、熱い股間に導いた。
後ろからなめらかな首筋に舌を這わせ、キスをして乳房を舐め回していく。
小さく喘ぐ沙織の顔を見上げながら、乳首を吸い、舌で転がす。

沙織は、するっとソファーから落ちて向き直り、俺のズボンとパンツを脱がしてフェラチオを始めた。

女性のしっとりとした指で握られ、たおやかな舌で舐められると根元に響く感じだ。
全体を丁寧に舐め上げられ、生暖かい口の中に俺のが入り、蠢く舌が亀頭をねぶり、吸われると頭がおかしくなるくらい気持ちいい…。
だが、何だかぐっと上がってくる射精感が来ない。

「うふふ。お父様にもらったハーブが効いてるみたいですね」
「や、ヤバイ奴なのか？」
「ドラッグや脱法ハーブではありませんよ。どこでもらってきたかは知りませんけど、灰になるまで楽しめますわ。わたしも避妊のための薬を飲んでますし、さあ、続きはベッドの上にしましょう」
「そうか、判った」

思ったより軽い沙織をお姫様だっこして、ベッドルームまで連れて行った。

キングサイズのブルーサファイアのシルクシーツに沙織の裸身を横たえるとグラビアのようだ。
俺は、本能的に抱きつき、お互いのからだを感じ合うとめちゃくちゃにしてやりたい衝動が突き上げてくるので思うがままに乳房を揉みしだき、乳首をこね上げ、脇の下に顔を埋めてキスをし、かたちの良い指先まで舐め上げたり、脇腹から腰、太ももまでキスして行って、きれいなふくらはぎ、足の指まで舐めてみたり、俺は謎ハーブでおかしくなってるんじゃ無いかと正気を疑う。

でも、沙織は、歓喜の表情で歌うように喘いでいた。

「どうだ、沙織。愛されているか？」
「ええ、とっても幸せですわ。京介さん」
沙織の両膝を大きく広げて、もわっとした匂いがする淡い茂みの奥を舐めている間、沙織は俺の陰茎を握ってゆっくりしごいている。
愛液もねっとりしてきたし、もういいだろう。

「じゃあ、入れるぞ」
「どうぞ、ご存分に…」

へそまで反り返った陰茎を握り、膣口になじませて押すと吸い込まれるように中に導かれ、熱くみっちりとした肉襞に飲み込まれたような感触に背筋がゾクッとした。
腰を使って行くと沙織の腰もつられるように動き、長い足が俺の腰を挟み逃さない。
いつもより低い声であぁー、あぁーと喘ぎ、時折、息を堪えているのは軽くいってるのだろうな。
汗ばむ沙織に俺は体を起こし、沙織の両腕をつかんで浅く深く腰を使って、まんべんなく沙織の女を堪能する。

うっかり射精してしまう心配が無いから大胆にできるが下腹が熱く、尿意のような感じが高まってくる。
今までに無く張り詰めた陰茎は沙織の中に馴染んで自分の物じゃ無く、別の生き物みたいだ。
そういえば、座位ってしたこと無いなと思って、腰を落としあぐらをかき、沙織を起こして、濡れそぼる沙織の中に下から突き上げた。
「あ、すごい…」と言いながら、沙織はキスしてきた。腰を回したり、突き上げたりしながら、口でもつながっている感じ。

沙織は、首を下げて、俺の乳首を吸ったり舐めたりするので、淫らな気持ちになって、
"あぁっ"とか声が漏れてしまった。
「京介さん、可愛いですわ」
「ば、馬鹿、へんなことすんな」
照れ隠しに沙織の乳首を甘く噛み、乳房をこね回してやりながらも腰が止まらず、俺の陰毛は沙織の濃い愛液でびちょびちょだ。

我を忘れて愉しんでいる間、いつの間にか夕闇が部屋を満たしていた。
沙織の光るような目が、俺を見つめ、俺の目はそれに囚われたかのようだ。
お互いの汗もべっとりしてくるような感じで俺の気力も限界に近くなってきた。
沙織の目もとろんとしてきて、はぁはぁと喘ぐばかりで朦朧としている。
ハーブの効果は切れてきて、俺の腰から暴走しそうな塊が抑えきれない。
沙織を押し倒し、正常位に戻ってラストスパートとばかりにぐだぐだとなった沙織の腰に暴力的に打ち込んだ。
沙織は呻くような、名残を惜しみ抗うような声で高まっていき、やがて沙織の中に俺のがぐっと掴まれ、強烈な塊が陰茎を駆け抜けて、沙織の一番奥で俺は、爆発した。
目の前が真っ暗になり、意識が上下に揺さぶられる。
沙織も息を詰めたまま、時折、荒い気を吐くばかりだ。そのまま俺の意識は暗黒に飲み込まれた。
目が覚めたら、沙織が見つめていた。
「小一時間ほど、寝てしまったようですね。うふふ」
沙織がキスしてくる。
「ああ、そうだったのか。俺はもう、ヘロヘロだよ。沙織は満足したか？」
「灰に、なっちゃいました」
「まったくだな、アハハ。まあ、なんだ、シャワーでも浴びるか」
「そうですね、でも、腰が抜けてしまって…。」
「だっこして連れて行ってやんよ！」
たいへん腰が頼りなかったが、これまた洗練されて広いバスルームで軽くシャワーを浴びて、ボディシャンプーでいちゃいちゃと洗いっこして、すっきりして着替えた。

「沙織もさ、こんなにストレスをため込む前に俺たちにできることで、発散していこうぜ」
「今更、恥ずかしくなってきました。でも、京介さんが居てくれて良かった」
やさしく抱擁して、和んだところで今日はお別れだ。
一緒にエレベーターで降りて、エントランスに来た。
「遅くなると桐乃がまた不機嫌になるからな」
「ほんと、兄妹仲がうらやましいですわ。最後にこれを…」
「カード？　なんだこりゃ？」
「カードキーです。京介さんがいつでもここに来られるように、です」
「変な意味じゃ無く、役立つときもあるだろうからもらっておくよ。じゃあな！」
「ごきげんよう。また、皆さんと遊びましょう」
「ああ、またな！」
沙織に見送られ、俺はマンションを出た。
自動ドアを出ると夕凪が心地よい…が、ずいぶん腹が減ったよ。
足早に駅に向かいながら、俺は誰かを選ぶことができるのだろうか、それとも強引に決められちまうのか？なんて当て所なく考えて居たはずが、いつの間にか夕飯のメニューは何だろう？に支配されて、帰宅した。

「逃げ場にならない一人暮らし　その１」

アレは、まずかった。調子に乗っていたよ。昨夜は、桐乃が小生意気なことを言うので、しっかり懲らしめてやったのはいいが疲れて、寝坊しちまった。

母親が起こしに来た時、桐乃が俺の隣で寝ていたわけで。

もちろん、パジャマを着せて寝かせたので最悪の誤解を避けられたものの、家族会議となり、来年の大学受験を控える俺に不安を感じた両親が、模試でＡ判定取るまで近くのアパートに隔離されることとなってしまった。

まあ、このところの桐乃にちょっとウザさを感じていたり、少々落ちてきた成績に不安を感じていたので渡りに船というとこが、正直な気持ちだ。

部屋の荷物を段ボールにまとめて親父が借りてきた軽トラックに積んで、アパートに運んだ。

自分の部屋はたいした荷物が無いので小一時間ほどで引越しを終えてしまった。

部屋はホコリっぽかったので軽く掃除をしてから、段ボールを開けて机や棚の位置を決めて、元あったように復元していく。

あらかた終わった頃、携帯が鳴ったのでディスプレイを見ると桐乃からだ。

「何だ？　引越しなら、終わったぞ」

「じゃあ、タイミングが良かったね。引越しそば持って行くよ」

「ああ、もう夕方だし、ちょうど良かったよ」

散らかっていた物をまとめ、カラになった段ボールをまとめて押し入れに入れている頃、玄関のチャイムが鳴ったので慌てて、ドアを開けに行った…が？

「おじゃまします」「お久しぶりです」「邪魔よ、どいて」「きょうちゃん」とか、どたばたと大人数の女子がお越しですよ？

「あの、桐乃？　これはどういう…。」

「せっかくだから、声かけてみたらさ、みんな来た」

「みなさんで、おそばや天ぷらを買ってきました」

「このエビ天は、大きくておいしいですよ」

「ネギも持ってきたわ」

「鍋や食器、箸ももってきたよ」

俺が唖然としている間にそれぞれがエプロンを着用し、台所で桐乃が水の入った鍋を火にかけ、ネギがあやせの異様に切れる包丁で薄く切られ、山盛りになっていき、絶妙のタイミングで麻奈美がそばを上げ、ざるで水切りしていく。

天ざるが人数分出来て、瑠璃がてきぱきとテーブルに並べて準備が整ったようだ。

俺はテーブルに座っているだけしかなかったが、みんな台所に並んでいる。

「どのエプロン姿が一番好み？」

「はい？」

あ、なんかみんなの視線がコワいですよ？

「みんな似合ってるけど、強いて言えば、桐乃の桜色がいいかな？」

桐乃は当然という顔してやがる。

「相変わらずのシスコンっぷりですわ」

「きょうちゃん、あたしは？」

「別に問題ない。ま、まあ、せっかくのそばが伸びちまうぜ？」
複数のため息を受けつつ、みんなでいただきます、だ。
天ざるは、大変うまかった。食後のお茶は沙織が入れてくれた。
桐乃がしょうが無いなーってかんじで話を切り出した。
「それで、話があるそうよ。あんたも大変ね」
「な、何の話だ？」
…俺は、壁ドンされないようみんなを抑えるので手一杯だった。
何だかみなさん、俺の一人暮らしの世話をしたいようですよ？
それは大変ありがたいのですが、全員は不要です。
俺が口を出すと話がまとまらないので女子のみで分担、当番？を決めてもらい、
今日は、みなさんに感謝しつつ、帰ってもらうことにしました。
引越しやら先ほどの騒動ですっかり疲れたので風呂を沸かして入ることに。
湯船に浸かっていると今日の疲れが溶けていくかのようだ。
ぼーっとしているとカチャカチャとか妙な金属音がして、カチリと何かが回り、風がひゅっと抜けた。な、何だろう？とビビっているとぱさりぱさりと服を脱ぐような音がしたら、風呂のドアがガシャっと開いた。
「ひぃっ！」
「情けない声、出さないでください」
「あ、あやせ？　俺、戸締まりしたよね？」
「あの程度のシリンダーなんて…。」
平然とシャワーを浴びているよ。どういうこと？！
「ちょっと詰めてください。よいしょっと」

あやせは俺の前に割り込んできてざざーっと湯がこぼれた。
「今日、みんなで集まったのはお世話の件もありますけど、もっと大事な用件があったのです」
「うん」
「正直、腹立たしいことですが、みんなあなたに対して恋愛感情を持っているんですよ。
でも、あなたは誰にも本気で恋をしない」
あやせは俺の手に指を絡めてくる。
「成り行きでセックスしてしまったが、恋愛になるとは思ってなかったんだ」
「麻奈美さんは違いますよね」
「ああ。そこまで知ってるのか。恋人だ！と言ったものの、むぅ」
「抱いたからと言って恋愛になるわけじゃ無いんですよ。あなたがしてくれたことや人柄や全てがあって好きになって…わたしをあなたの心に住まわせて欲しくなったりするんです」
あやせの真摯な思いに俺は、打たれていた。
「あなたのことが好きになって…でも、抱かれたら幻滅したりするかなって思ってしてみたら、もっと好きになってしまったの」
「俺は、あやせにかなう男なのか？」
「ええ、今のところ。でも、この状況のあなたはダメです」
ちょっと、目の前が暗くなってきた。
「そんな顔しないで…。今の、精一杯の思いの、わたしを抱いてください」

熱く、柔らかなものが俺に抱きついている。これが今のあやせ。俺のことを全身で好意を表してくれる女の子。
俺は、どうすべきか？
いや、悩むことなんて無い。目の前のあやせのからだに聞いてみればいいさ。
湯船からあやせを抱き上げ、俺は出た。シャワーを浴びて、バスタオルで体を拭いた。
布団を引いて、あやせを寝かせて、明かりを常夜灯のみにした。
赤っぽい薄暗い光の中のあやせの裸身に俺は覆い被さり、抱き合って肌と肌を合わせるとあやせのかぐわしい体臭が漂い、熱意が伝わってくる。
「あやせ…」
「京介さん…」
自然と唇が合い、甘くてたおやかな舌が絡み合い、熱い吐息が漏れる。
耳元や首筋に唇を滑らせ、ふわっと立ち上るフェロモン臭に俺の心は動かされる。
小さめのあやせの胸に耳を当て、熱い鼓動を感じ、柔らかな乳房に気持ちが癒やされる。
手のひらでもそれを味わい、大事な物のように乳輪をつまみ、立ち上がった乳首をやさしく弄り、舐めるとあやせは甘い吐息を漏らした。
手のひらで確かめるように、このなめらかで柔らかなからだが俺を愛してくれるのか？と撫でていき、思いつくままキスをしていくとあやせの身体から力が抜けていき、されるがままだ。
そんな姿にムラムラしてあやせの可憐な唇に自分の陰茎を押しつけた。
ちろりと舌が先を舐めただけで出してしまいそうだけど、やめられない。
６９の体勢になり、お互いの熱く昂ぶった性器を舐め合った。

愛撫していくうちにあやせは喘ぐばかりで舐められなくなってきたので、俺は起き上がってコンドームの箱を探して１枚取り、装着した。
この前とは違って抱きたい、入れたいという思いであやせの膣に張り詰めたものを当てて、熱くぬめるそこにぐーっと挿入すると、たまらない感触で俺を受け止めて蠢いた。その熱い刺激が俺の陰茎を痺れるような快感を与え、無我夢中にさせて、呻いてるあやせとさらに深く繋がって動いていく。
声を堪えて喘ぐあやせに愛おしさを感じつつ、乳房をわしづかみにし、乳首をこねり、唇を貪りつつも、あやせは身をよじりながら俺の腕から手を離さない。
肌が溶け合うようなたまらない一体感で俺も喘ぐように腰を使い、健気な思いに応えようと必死になったが、やがてどうしようも無い高まりにぞくぞくしながら、耐えきれなくなった声を上げるあやせの奥で、俺は何度も何度も弾けた。
「あやせの思い、熱かった」
「はぁはぁ…恋をすれば、相手にして欲しい、したいことって出ると思うんです。わたしにそういう思いをぶつけてくれましたよね」
「ああ、恥ずかしながらな」
「それでいいんですよ、京介さん」
「あやせ…」
名残のキスをして、部屋の明かりを明るくしてシャワーを浴びた。
あやせは、ささっと服を着て、
「泊まるわけには行かないので」
「おやすみ、あやせ。俺もまじめに考えるよ」
「ふふふ。では、おやすみなさい」

手を振ってあやせは、帰って行った。それにしても俺は、あと４人も思いを受け止め、選ばないといけないのかと思うと気が重かった…が、初日からだらけてはいけないので気持ちを切替えて、寝る前に勉強は、ちゃんとした。

「逃げ場にならない一人暮らし　その２」

翌朝、そろそろ起きないとなと思っていると例の不審な物音と共に玄関のドアが開いて、
「おはようございます、京介さん」
「…ああ、おはよう、あやせ。朝からご苦労様だな」

昨日に続いて、マイラブリーエンゼルと朝から会えるなんて俺は幸せ者だなと思いながら、布団から起き上がり、窓を開けて、布団をたたんで押し入れに仕舞った。
キッチンの方を見るとてきぱきとあやせがパックに詰めてきた朝食を皿に盛りつけているところだった。
輝いてるなあ、いい光景だと思いながら、席に着いた。

ＴＶを点けて朝のニュースを見ながら、あやせと朝食だ。昨日のことが微塵も無く、はつらつとしていて、時折、顔を赤らめたりしているのが初々しいな。

朝食が終わり洗い物は俺がやった。それくらいは出来るしさ。歯磨きも済ませた。
昼用の弁当をもらい、あやせはもう、出かけるようだった。

「では、これでおいとまします」
「ああ、朝食や弁当、ありがとな！」

「あの…。」

あやせはもじもじしている。む？これは、あれか。
チュッとキスをすると正解だったようで、あやせは輝くような微笑みだ。

「行ってきます！」
「気をつけてな！」
さて、俺も遅刻しないようにしないとな。弁当を鞄に入れて戸締まりして登校した。

学校から帰る途中、合い鍵を人数分作った。あやせは要らないと言うかもしれないが、そのうち、絶対通報されるって。
帰宅して、今日の課題と受験勉強をしているとチャイムが鳴ったのでドアスコープを覗くとあやせだ。用意しておいた合い鍵を渡すと特別な物をもらったように喜んでいた。
他愛も無いことを話しながら俺は勉強を続けて、あやせが作った夕飯が出来たので、一緒に食べた。後片付けして、弁当箱も洗ってあやせに返した。

「では、お勉強の邪魔にならないうちに帰ります」
「ホント、ありがとな。おやすみ、あやせ」
当然のように可憐な唇にキスをし、
「おやすみなさい、京介さん」
と部屋にいい匂いと暖かな雰囲気を残してあやせは去って行った。いい子だなあと思いつつ勉強を再開した。かなり眠くなってきたので風呂を点けて、PC を立ち上げてメールや沙織たちの掲示板を覗いているうちに風呂が沸いたので入った。

明日は、誰が来るんだろうと思いながら、風呂から出て、寝た。
目覚まし時計を止めて、ぼんやりと起きたら、ピンポーンとチャイムが鳴った。
ほいほいと玄関に向かって、ドアを開けると瑠璃が居た。
「おはよう、京介」
「ふぁー、おはよう、瑠璃。今日はお前なんだな」
「そうよ。上がらせてもらうわ」

部屋に上がった瑠璃に何となく違和感があると思ったら、制服が違うんだな。
「セーラー服なんだな、新しい学校の制服は」
「ど、どうかしら？ 前のブレザーの方が…好き？」
後ろ手に鞄を持って、瑠璃がふりふりとしてる。
「いや、これはこれで素晴らしい」
「…っふ…そうかしら、ふふふ」

さて、瑠璃の朝食は、和風だな。用意が出来たところで"いただきます"、だ。
静かな朝にもぐもぐと朝食を食べつつ、
「…こうして、あなたと静かに暮らしてみたいわ」
「そうだな…、俺は和食が好きだし。この味噌汁もいい出汁出てるよ」

母親の味とは違う、淡いが心を満たすような味わいは、瑠璃が俺を思う気持ちが入ってるからだろうか。
「どうしたの？ 急に見つめたりして」
「特別においしく思えてさ」
「あなたのために作ったんだもの…。 当然だわ」
瑠璃はまじめな顔でそう言った。こういう感じもいいな。
朝なのであまり和んでも居られない。朝食を食べ終えたので片付けて、弁当を受け取った。
そうそう、合い鍵も渡さねば。
「ほい、これ。必要だろ？」
瑠璃は、渡された手のひらの上の鍵をじっと見つめている。

「…いいの？　あなたの部屋に自由に出入りできてしまうのよ？」
「信頼の証さ」
得意げな俺に、瑠璃は俺の胸に顔を埋めて…ふるふるしている。喜んでるのか？
「…っふ…ありがたくいただいておくわ。さて、もう行かなくちゃ」
「ああ、うちから遠いんだものな」とチュッとキスを。
昨日のあやせと同じ感覚でしてしまったら、瑠璃はぽぅっと赤くなった。
「…もぅ、いきなりなんだから。行ってきます。」
「気をつけてな～。」
さてさて、今日も遅刻しないようにしないとな、と登校した。
昼休み、麻奈実と弁当を食う事になった。
「いい天気だね～、きょうちゃん。あ、そのお弁当、瑠璃ちゃんのでしょ？」
「ああ、そうだよ。俺に合わせて肉とか増やしてくれたんだぜ」
「ちょっと味見させてね。むむ、これは？…なかなかの物」
「そうか？　麻奈実の料理とはちょっと違うよな。お前のもよこせ」
「どれでもどうぞ。アパートの生活は、どう？」
「何の不自由もないぜ。桐乃も居ないから落ち着いて勉強できてるよ」
「桐乃ちゃん、来てないんだ。そうか～、ふうん」
何に納得してるんだか。いつものようにほんわかとした雰囲気で昼休みを終えた。
授業を終えて、まじめに勉強するべくまっすぐアパートへ帰った。
ドアの鍵を開けると、すでに靴がある。

「おかえりなさい、京介」
「ただいま～、瑠璃。来るの早いね」
「あなたと二人で過ごせる時間は、出来るだけ長くしたいから」
そうか、そうだよな。鞄から弁当箱を出して瑠璃に渡す。
「弁当、ありがとな。おいしかったよ」
「当然よ。きれいに食べたようね…。」
空になった弁当箱を見て、満足げだ。俺は着替えて、机に向かう。
瑠璃は、夕飯の準備しながら、洗濯機を回している。そういえば、朝は忙しいし、昼間は誰も居ないから、洗濯も干したりも出来ないんだよな。
脱水が終わり、洗濯物を干し終えた頃、
「夕飯が出来たわ」
「ああ、そろそろ飯にするか。」
いい匂いのするおかずが載っているテーブルに着く。
高坂家だと食事中は会話がないが、瑠璃のところもそうなのかな。しずしずと食事が進み、お茶を飲んで一息だ。食べ終えた食器を片付け始めたので、
「洗い物は、俺がするから」
「…判ったわ」
おとなしくテーブルに座ってる瑠璃も、あやせ同様、話があるんだろうな。
二人分だから洗い物もすぐ終わってしまったので、テーブルに戻り座った。
「それで、あやせから話を聞いたんだけど、瑠璃はどうなんだ？」
「…っふ…私はあなただけを愛しているし、あなたにも私だけを愛して欲しいの。でも、あなたは好意によって揺れ動くだけで誰のものでもない状態よ。」

「確かに、ぐうの音も出ないくらいそういう感じだよ」
「あなたが誰かを選ぶと他の４人は、その資格を失い闇に飲まれるようなもの。でも、選ばれた人は光り輝き、何の引け目もないわ」
「俺は、ハーレムやれるほど度量も甲斐性がないから、そう言う感じかな」
「あなたの歓心を得るにはどうしたらいいのかしら。血の契約でも必要なの？」
「厨二やオカルトは、止めていただきたい」
「今日のお弁当や夕飯は、どうだったかしら…。あなたの心に何か残った？」
「そうだな…味付けとかじゃなく、よく判らないが…大事なものがあった気がする」
瑠璃は俺をじっと見つめ、そして、意を決したようにこっちに来て、
「それは……。」
瑠璃は俺の首に手を回し、キスをしてきた。
唇が吸い合って舌が絡み合い、流し込まれた瑠璃の唾液と俺の唾液が混じり合う。
その味というか変化には、何か、神秘的なものを感じてしまう。
乳児が母乳を求めるような、大事なもののように。
「…っふ…いい表情だわ。ねぇ、もっと濃い何かを感じた？」
誇るような、すがるような顔の瑠璃。甘い香りが濃くなってきた。
「ああ…。何だろう、もっと欲しくなる気がする」
確かめるようにもう一度、ディープキスをした。
「それは、甘美な毒よ。あなたの魂を侵し、生涯にわたって効果が消えないの。定期的に摂取しないと死に至るのよ。それでもあなたは求めるの？」

「毒でも微量なら薬と言うしさ、今は、もう、その何かをもっと知りたいんだ！」
「いいわ、出し惜しみなんてしない。あなたの手で私の大事なものを受け取りなさい」
艶然と瑠璃は微笑み、するすると服を脱いで全裸になった。
瑠璃の妖気にかどわかされたような気がするが、いや、俺は大丈夫さ。
布団を敷いて瑠璃の身体が痛くならないようにして、コンドームを用意する位の心遣いが出来るほどには、な。
俺も裸になった。
瑠璃は、膝立ちになり、俺の半立ちのペニスを握り、そして、フェラチオを始めた。
「あなたのここにも私の毒を染みこませてあげるわ」
さっきのキスをした唇が俺のを咥えている。先から生暖かいものが蠢き、俺のペニスにじわじわと甘美な快楽を送り込んでくる。
ゆるやかに舌でねぶられ、口に出し入れされていくうちに熱い物がこみ上げて来て思わず、膝がガクガクするほど出してしまった。
「けふっ…熱いものが私の喉を降りていくわ。さあ、どうするの？京介」
淫らなことを言う瑠璃に我を忘れ、布団に押し倒した。
あの感じがどこからくるのかどこで味わえるのかあちこちをなめ回し、キスをして確かめてみた。
はぁはぁとかすれるように喘ぐ瑠璃の小ぶりな乳房を手の平でぐにぐにとこね回し、左右の乳首に吸い付いた。
指先で乳首を弄りつつ、あの唇に舌を入れ、ぬめぬめと吸い合った。

胸の間からずーっとへそ、そして、淡い茂みの奥まで舐め下ろし、そして愛液のこぼれる膣口を吸うと、んっんっと呻く瑠璃にもっと濃い何かを感じた。
クリトリスをやさしく弄りながら、舌を使い、指を中に入れながら、しっとりとした太ももに舌を這わせていたら、瑠璃の顔は赤らみ、唸り始める。

「ねえ、そろそろ…あなたの物を私に…。」
「出来れば、生で入れてみたいんだ」
「それは、私だけを選ぶ覚悟が出来てからよ」
「仕方ないな」
俺はコンドームを装着して瑠璃の膝を立て、熱い膣口に当てて、挿入した。

小柄な裸身が俺の下で喘ぎ、逃れるように身をよじる。抱きしめるようにしながら、瑠璃と一体になってこの特別な感覚を逃さないように味わった。

やさしく首筋を撫で、キスをして甘い唾液を味わい、乳房をこねて、ぴんと立ち上がった乳首を柔く噛んだりすると背筋がはねるように反応する瑠璃が愛おしい。

浅く深く瑠璃の中を動いている俺の胸の中に、温かい水のような潤いが生まれてくる。
これが瑠璃と俺との愛情なのだろうか。

瑠璃は、どう感じているのだろう。

ふぅふぅと喘いでいる瑠璃は薄目を開けて陶然としているようだから、同じような気持ちなのかなあ、とか思っている間にまた、どうにもならない衝動が抑えきれなくなってきたので、腰のスピードを速めて、瑠璃の喘ぎのリズムに合わせ、一番奥にどくどくと射精した。

「…温かで、瑠璃に包まれているような気持ちだ。これは毒じゃ無いだろう」
「…っふ…毒が効き始めてる証拠よ。私を選べば、もっと甘美な世界に行けるのよ？」

「この毒がいい物かどうか判らないが、強烈な誘惑に負けてしまいそうだぜ」
「ふふふ。さあ、シャワーを浴びたら、ちゃんと勉強するのよ」
「そうだな。色香に負けて成績が落ちたなんて恥さらしもいいとこだぜ！」
「…っふ…その意気よ」

瑠璃を抱き上げて、風呂場に入って、ボディーソープで洗いっこしてシャワーですっきりと気持ちを切り替えた。

「今日はこれで帰るわ。しっかり勉強してちょうだい、京介」
「ああ、いろいろ感謝だぜ。おやすみ、瑠璃」とキス。
「おやすみなさい」と、闇に飲まれるように瑠璃は帰って行った。

こんな魅力的な子ばかりを俺は本当に選べるのか不安になってきたが、
まあ、一通りみんなの気持ちを受けてみないと判らないからな。
とか思いつつ、俺は遅くまでちゃんと勉強したさ。

「逃げ場にならない一人暮らし　その３

連日これでは、身体が保たないんじゃ無いか？と思うこの頃だが、否応なく朝がきて、無情にも目覚まし時計が俺をたたき起こすのだった。

ふぁーねむい。起き上がって布団をたたんでいた所、ドアを控えめにコンコンとノックされたので、ドアを開けに行った。

「おはようございます、京介さん」

「ああ、沙織か。俺は眠いよ…。」

沙織のふくよかな胸に俺はもたれかかった。

こんな所に天国があったなんて知らなかったよ。

「うふふ、甘えん坊さんですね…。でも、こんな所を他人に見られたら困りますよ」

と、俺はくるっと向きを変えられて現実に戻り沙織に背中を押されて部屋に入った。

沙織は、トートバッグの中からいくつかパックを取り出し、電子レンジで温め、棚から皿を出して手際よく並べ始めた。

「何だか、お疲れのようですね。食後にこれを飲んでください」

と２０００錠も入ってるでかい瓶を置いた。エビオス錠？

「ビール酵母で健康に良いんです。さあ、朝食にしましょう」

テーブルには、きれいに盛りつけられた温かい皿とジュースが並んだ。

「そうだな。へー、オムレツと、こ、これってモーニングステーキって奴？」

「ええ、元気が出ますのよ。脂身の少ないフィレ肉を使ってますから胃にもたれませんし」

「すげぇなあ。金持ちはいい物食ってるぜ」

付け合わせのポテトやサラダまでもレベルが違う気がしてきた。

「さあ、冷めないうちにどうぞ」

「いただきまーす！」

朝から、ナイフとフォークを使うなんてアパートの台所には違和感バリバリだけど、沙織が座っているだけで、それらしい雰囲気になってしまうのが大したものだ。

上質な肉だけに噛むほどにうまみが染みて、ぼやけていた脳を活性化させるなあと味覚に浸っていた俺を、沙織は微笑みながら見つめていた。

「沙織は、こんな朝食をあのマンションに一人で？」

「そうなります。　だから、こうして誰かと朝食と言うだけで、とても楽しくて…。」

「うちは家族一緒だから、想像も付かないな。ふーむ…。」

そんなところにいる自分を想像しつつも質は高いが量はたいしたことない朝食をあっさりと食べ終えて、沙織がごっそりと盛ったエビオス錠をもらい、なんとかジュースで流し込んだ。

「こんなに飲んで大丈夫なのか？」

「１日３０錠が基本ですから、多すぎるってほどじゃないですよ？これはお昼のお弁当ですので、どうぞ」

保温が出来るちょっと重いくらいの弁当箱だな。

「ありがとう。朝からありえないくらいうまかったよ、ごちそうさま」

「うふふ。昨夜から準備しておいた甲斐がありました。では、そろそろこれで。」

「ああ、気をつけてな」

すっと寄ってきて、柔らかなキス。

「はい、行ってきます…。」
ふわっといい匂いを振りまいて、沙織は去っていった。
その残り香にほんわりとひたっていたら、そろそろ危険な時間だ。
俺は慌てて準備し、部屋の戸締まりをして階段を駆け下り、学校に登校した。

特にどうということもなく午前中を終えて、昼休みは今日も麻奈実と。
「今日のは、ちょっと変わった弁当だぜ」
サーモスだったか？大ぶりの弁当箱だ。何段も容器が入っているぜ。

「すごいねー。おかずとスープが冷めてないね。沙織ちゃんのだっけ？」
「おう。今朝も豪華だったよ」
「今日も一口ちょうだい。ふむ～みんなすごい気合いだね。きょうちゃんの好みが変わっちゃうんじゃないかなあ」
麻奈実は、むむむ？としている。

「そうだよなあ。どうなってしまうのか」
「ねえ…やっぱり、桐乃ちゃんは、ちらりとも来ない？」

「ああ…そのせいか、スゴイ平和だ。　あいつが気を遣うとは思えないが…。」
「たぶん、近々、おどろくような事があるよー麻奈実は予言するよ。」
「むぅ。何が起きるんだ！？」
とか話しつつ、微妙な心持ちで昼休みを終えて、授業を終えたらさっさと下校した。

帰り道にスーパーに寄って買い物した後、ぷらぷらと歩いていると桐乃の姿を見かけた。
何処かに出かけて行くようだった。しゃれた格好だったのでモデルの仕事かな？
と思ったのでスルーしてアパートに帰った。

着替えて、今日の課題とか片付けていると、こんこんとノックが。
「おかえり、沙織」
「ただいま、京介さん。ちょっと遅くなりました」

何も言わずともおかえりのキス。

「かなり遠いからなあ、お前のマンション」
「でも、ぜんぜん辛くないですよ？　ふふふ。　早速、夕飯の支度しますから」
「ああ、頼むよ」

明らかに楽しそうな沙織を尻目に俺はまじめに勉強を続けた。
しばらくしてから、後ろに気配がして柔らかな手が肩に置かれた。

「ご飯ですよ、あ・な・た」
「お、オイ！　驚かすなよ」
おどろいて振り返る俺に沙織は満足げだ。くそー。

テーブルには、色とりどりの料理が並んでいる。華やかだなあ。
「あのさ、今回は変なハーブとか入れてないよな？　念のため。」
「もちろんですわ。あのときはとんでもない事をしてしまって、済みません」
沙織は、立ち上がって深々と頭を下げている。

「いや、めったに出来ない経験させてもらったので、そんなに謝らなくても」
「お父様に詳しく聞いたんですが、あれはいわゆる“秘薬”で、タントラや房中術でも使われるようで、用法を間違えると死に至る事もあるとか…後で冷や汗をかきました」
「タントラ？　ぼうちゅう？」
「いえ、性のエネルギーで秘儀、秘術を行うというたぐいで、あとでググってみれば、大体判ると思います。それはいいとして」

ああ、本題に入るんだな。
「私の姉の話を以前したと思いますが、ああいう人だから相談事も出来ないので、今まで本当に頼りになる、あり得ない状況にも対処できるパートナーを求めて、サークルや友人を作っていたのですが、なかなかそういう人が居なかったのです」
苦労と絶望が頭をよぎったのか、表情が曇ってきた。
「きりりん氏を中心とした、今までの事であなたならその可能性がありそうだと思って、綿密に計画と準備をして、招待したわけなのです」
神妙な顔で沙織が語り続けている。
「俺は、試されていたのか？」
軽い怒りがこみ上げてきた。
「…でも、あのときの言葉、思いは本物です。そして、あんな展開にも京介さんは対処でき、大変、満足の行く結果を私に下さいました」
沙織はあのときの事を思い出したのか上気した顔で、晴れ晴れと俺に思いを語っている。
「あなたなら、私のパートナーになれる存在だと思います。だから、私の事をもっと知って欲しい、あなたの事をもっと知りたい、独占したい！と思っているのですよ」
「そう、だったのか、沙織」
「はい、京介さん…。まことに身勝手な願いですが」
熱く思いをぶちまける沙織の姿に俺は打たれて、無謀にも何とかしてやりたいと思った。

「俺は、平凡な人間だよ。たいしたことが出来るわけじゃねえ。でもさ、沙織には何か、してやりたくなるんだ」
「京介さん、今は…沙織を抱いて下さいませんか？　この間のことが忘れられなくて」
恥じらう沙織が愛おしい。思わず、立ち上がって、後ろから抱き締める。
「ああ、抱いてやるともさ！」
いそいそと布団を敷いて、コンドームも用意して。
お互い、裸になって抱き合い甘く熱いキスを貪った。
そして、我慢できなくなった沙織は、布団に四つん這いになって、俺に陰部をさらけ出して尻を上げて長い足の付け根にある、熱く濡れたひだを指で広げながら、
「避妊薬は飲んでありますから、沙織のここに、京介さんの熱い物をぶち込んでください。」
その強烈な媚態に俺の陰茎は瞬時に張り詰め、反り上がった。
沙織の素晴らしい柔らかさの尻を掴み、一気に挿入すると熱い肉壁が俺の物を迎えて、ぐっと締め付けてくるのを押しのけて奥まで入れた。
沙織は背筋を震わせて、感じ入ってる。
「あぁ…、いい…。」
腰を掴み、焦らすようにゆっくり出し入れしていく。
「俺はさ、沙織。もしかしてこういうことしか期待されてないのかな」
「はぁ、ふぅ…これもあなたとの大事なこと。私と話したり、遊んだり、時には、あぁ…、難しい、ことも、頼むかもしれません。でも、あなたが出来る範囲でしてくだされば」

たわわな乳房を弄び、乳首を弄りながら沙織の中の磁力を帯びたようなたまらない感触を味わいつつ、
「今の俺には想像も付かないけど、はぁ…、楽しいこともあるかな？」
「あなたに抱かれて、あぁ…んんっ、私は体中が幸せでいっぱいですよ。だから、はぁはぁ、二人で出来ることは、楽しいこと」
「そうだな、そんな気がしてきたよ、沙織」
自信を持ってぱんぱんと沙織の溶け合ったようなような中に漲った陰茎を突き入れていくと沙織の太ももに濃い愛液がしたたり落ちていく。
「あぁ、逞しいですわ、京介さん」
沙織の身体を起こして、腕を掴みながらずんずんと。汗の流れる首筋を舐め、振り向いた沙織と舌を絡ませ、キス。
「京介さんの上に乗りたいです…。」
「わかった」
俺は寝そべり、沙織は俺に跨がり、淫らな顔をして陰茎を握って挿入していた。
「手をつないで、京介さん」
指を絡ませ、しっかり握って、沙織はぐいぐいずんずんと思うがままに俺のを弄び、歓喜の表情で喘いでる。そんな沙織も綺麗だなと思う。
汗だくになり、沙織は倒れ込んできたら乳房が近いので揉みながら乳首を吸ったり、舐めたりしていると膣が反応して沙織は、ぎゅっと抱きついてきた。
「もう…、そろそろ…いいか？」
沙織がうなずいたので、沙織の下から出て正常位に戻して抱き合い、密着しながら、激しく沙織の中を暴れ回り、沙織の喘ぎ声に合わせて奥に突き入れ、激しく射精した。

何かをやり遂げたような爽やかな気持ちだ。沙織にキスをして、頭を撫でてやる。
「京介さんも、気持ちよかった？」
「もちろんだよ。今もまだ俺のが余韻で痺れてるよ」
「うふふ。独りよがりじゃないですよね」
「そうだよ、沙織」
シャワーで汗を流して、ふたりできれいに洗って出た。
窓を開けて換気し、さっきまでのことが嘘のように沙織はお嬢様に戻っていた。
「では、お勉強のお邪魔にならないうちにおいとましします」
「沙織のこと、よくわかったよ。じゃあ、おやすみ」
ぎゅっと抱きついてきて、キス。
「おやすみなさい、京介さん。沙織はパートナーを心待ちにしてますよ」
「ああ、じゃあな！」
華やかな雰囲気を残して沙織は去って行った。
窓を閉めて、気持ちを入れ替えて勉強しているが毎日生涯の約束みたいなことになっているが、どうなってしまうのだろうか？と思いつつ、激しい運動をした後は自然な眠気が襲ってくるので、そんなに頑張れずに寝てしまった。

「逃げ場にならない一人暮らし　最終回」

まあ、その後もみなさんのお世話になりながら、模試までに間、ほぼ誰ともセックスもせずに、清い毎日でしっかりと勉強をして、無事、A判定をゲットだぜ！

この、印象深くて奇妙な毎日ともおさらばだよ。押し入れから畳んだ段ボールを出して、組み立てていって、荷物を詰め込んでいく。

これで、終わるんだ…と思うと何だか寂しくもなるなあと感慨に浸っていると携帯が鳴ったので取るとディスプレイには桐乃と出てる。

「何か、久しぶりだな。元気か？桐乃」

「それはこっちのセリフよ。それより、A判定記念パーティをそっちでするから、そこで待ってなさいよ？」

「ああ、みんなでか？」

「そうよ。じゃあね！」

引越祝いと同じような騒ぎになるのかねえと思いながら、段ボールに詰める作業を続け、あらかた終わった頃、チャイムが鳴ったのでドアを開けたら桐乃だ。

「なんだ、疲れた顔しているかと思ったら元気そうじゃない」

「俺は、A判定をやり遂げた男だからな、ふん！」

「そうね。さあ、大家さんに話を付けてあるから、庭でパーティをするの。早く来なさい」

「ああ、今、行くよ」

桐乃の後について、階段を降りていくとアパートの庭に簡易テーブルにクロスが掛けられ、和風洋風の料理や和菓子とか誰が何を持ってきたのか一目瞭然という感じの皿が所狭しと並んでいた。

みんなそろってるな。一同に揃うと感慨深いよ、俺の未来の嫁たち。

ジュースの入ったコップを渡されて桐乃の音頭で、

「では、京介のA判定とアパート追い出し記念で、かんぱーい！」

「「「かんぱーい」」」

大変、晴れ晴れとした気分だ。ジュースがやけにうまい。

「それで、京介。誰に決めたの？」

「えっ？！　誰にって…。」

「あんた、2ヶ月近くこんなに可愛い女の子たちに毎日お世話されて、何とも思わなかったの？せっかくお膳立てしてあげたのに。ひょっとしてホモ？」

「なわけあるかっ！　その、何だな、誰にと言うとだな」

オイオイ、みんなきらきらした目で俺を見つめてるよ。

「正直、魅力的すぎて俺にはまだ、決められないよ。というか後半、勉強に集中してて、色恋なんて頭の片隅にも、無かったぜ…。」

「お兄さんのことだからそんな感じだと思ってましたけど、かまいませんし」

「京介、誤魔化さなくてもいいのよ。堂々と契約について説明なさい」

「私のパートナーは、京介さんですから」

「きょうちゃん、まだ、あたしが恋人だってみんなに言ってなかったの？」

みなさん、すいませんでしたと俺は、雰囲気的に土下座した。

「あはは、何、土下座してんのよ。　やっぱりね。あたしはさ、京介の全てを見てきてるわけで、最後は…ちょっと言えないことまで飽きるまで知ってしまったし」

「お、オイ、桐乃、何を言い出してるんだ？」
俺は、震えが来ていた。
「だから、はっきりした。あたしに必要な男は、"京介"じゃ無いの。あんたには言葉で言い表せないくらい感謝してるけど、兄妹であっても恋愛対象じゃ無いわ」
庭は、しーんとしている。
「この２ヶ月の間、考えてさ、そしてもう、あたしは行動に出ているの。自分にふさわしい男を探している。あ、御鏡なんて変態は眼中に無いからね？」
「やっぱりね、きょうちゃん、この間、言ったこと、当たってたでしょ？」
「麻奈美、さすがだぜ。うすうす感づいていたんだな」
「そう。でも、桐乃ちゃんのじゃましちゃ悪いからはっきり教えなかったよ」
「ありがとう、麻奈美さん。まあ、そういうわけよ。あたしは見限ったけど、あなたたちは、どうなの？」
「わたしもお兄さんも桐乃みたいにスーパーマンじゃありませんから」
「あんたみたいなビッチには京介の肝心なところが見えてないみたいね。哀れだわ」
「きりりん氏、わたしはあなたの知らない京介さんを知ってますよ」
「きょうちゃん、あとでこの２ヶ月の間のこと、全部教えてね？絶対だから」
ふらふらと立ち上がり、一時はどうなるかと思ったが、何だよ、俺は生きてていいの？と周りを見回したら、あやせも瑠璃も沙織も麻奈美もやさしい表情だ。
「今までありがとう、京介！」
桐乃は、唇にキスしてきた。俺と桐乃の目になぜか涙が流れた。
これで、正常に戻るんだよな。

「はい、これであたしの言いたいことはおしまい！　さあ、飲み食いしながらあんたの２ヶ月間を根掘り葉掘り聞こうじゃ無いの！」
まーこの後は大変な騒ぎとなり、ご近所から怒られたりしたが誠に楽しい宴となり、宴のたけなわな頃、親父の軽トラックが来て、親父に彼女たちの関係を聞かれ、また、お父様にご挨拶を！とか冷や汗でまくりで、俺の２ヶ月間の刑は、終わったのだった。